ほんまもん体験レポート
「本マグロ養殖体験」
串本町大島

船に乗って本マグロの行っちゃいます。

重要になってくる、和歌山とマグロの関係。

黒潮などの海流にのって世界の海を回遊するマグロ。その黒潮の影響を大きく受けているのが和歌山の海だ。生マグロの水揚げ高日本一を誇る那智勝浦町をはじめ、和歌山はマグロという海の恵みを受けてきた。今、国内でも海外でもマグロ需要が高まる中、国際的にも資源保護の動きが高まっている。本(クロ)マグロ、ミナミマグロにおいては、日本の漁獲高枠が削減された。遠洋漁業での漁獲では間に合わなくなってくる今後、一年中安定した供給が期待できるマグロ養殖の重要性はさらに注目されるだろう。串本町・大島は、世界初のクロマグロ完全養殖を成功させた近大水産研究所もあるマグロ養殖が盛んな地。そこで「本マグロ養殖体験」観光が人気を集めている。マグロ養殖の世界を探りに、体験リーダーをつとめる大島漁協組合長・吉田俊久さんを訪ねた。

こだわりと情熱がつまった、マグロ養殖の世界。

大島港から吉田さんの漁船に乗っていけすへ。風を切って走る船の上は最高に気持ち良い。いけすに着くと、指導のもと円形のいけすに餌を投げ入れる。反応が薄い。しばらく餌やりを続けると、マグロがすごいスピードで食いつく姿が見えた。さすがの迫力。マグロも慣れるのに時間がかかるのだろうか?「さっき釣られたから、みんな警戒してたんだなぁ。向こうも必死だからね」いけすのマグロとはいえ、釣って取り上げる。釣られたマグロは抵抗する。その際体温が上昇し、下手に手間取ると体温で身が焼けてしまい商品にならない。「釣り上げも、後の処理も技術がものをいう。だからうちのマグロは見た目も美しくて、くせがなく美味しいんだよ」餌やりの後に頂いたマグロの刺身で、その言葉に納得。吉田さんのマグロにはリピーターが多い。養殖を始めた頃は、失敗の連続だった。マグロ養殖には、稚魚の仕入れから、いけす・餌の工夫や出荷まで全てにノウハウがつまっている。天候にも影響を受けやすい。「日々勉強。常に新しいアイデアのためにアンテナを巡らしてるよ」吉田さんの情熱が、美味しいマグロのもとなのだ。

大島で本マグロ養殖体験ができます。
※予約期限 前日12時まで
●串本町大島
実施期間:通年／所要時間:2時間半
料金:一般3,000円/人・小学生2,500円/人
＜お問い合わせ先＞串本町観光協会
TEL: 0735-62-3171
http://www.town.kushimoto.wakayama.jp/

建築アート散歩
HENCHIHU ART SANPO
潮岬灯台・樫野埼灯台

時代を刻む潮岬と樫野埼灯台。

本州最南端、潮御崎神社の境内だった地に建つ潮岬灯台。トルコ軍艦エルトゥールル号遭難の海を見つめる樫野埼灯台。どちらもその歴史は古く、明治時代イギリス人土木技師リチャード・ヘンリー・ブラントンによって建てられた。歴史的観点、建築学的観点を探っていくと、二つの灯台は明治初期の洋風建築を代表する建造物であり、開国という日本の歴史を物語る象徴的存在でもあるのだ。ブラントン設計の灯台に詳しい県教育庁文化遺産課の田中修司にこの二つの灯台について語ってもらった。

開国と近代建築の歴史を物語る貴重な建築物。

一八六六年幕末、英・仏・米・蘭の4カ国と締結した江戸条約で幕府は灯台の建設を約束し、その後各国との協議の結果8つの灯台建設が決められた。うち2つが和歌山県の潮岬と樫野埼だ。当時灯台もない日本への航海は、外国船にとって危険なことだっただろう。

潮岬灯台の官舎

そのため灯台の建設は開国の証(あかし)となった。明治元年イギリス人土木技師ブラントンは明治政府の要請を受け、灯台の設計・建設の準備を始める。彼の最初の仕事のうち2つが樫野埼と潮岬だった。樫野埼は石造、潮岬は木造灯台が建てられたが、潮岬灯台は、耐久性が問題となり明治11年石造で建て直されている。両灯台に寄り添うように建てられた官舎は、全く同じ建築構造だ。

文化遺産課の田中によると「明治3年ほぼ同時期に完成した、この二つの灯台は双子のようなもの」だと言う。現存する両官舎は、見たところ非常に簡素だ。当時欧米では、建築家はあくまでデザイナーであり、構造設計は技師の仕事だった。開国間もない日本では、デザインよりも機能が重視され、技術者が呼び寄せられた。「よく知られる装飾的な近代洋風建築というのは、後に来日した建築家によるもの。初期の洋風建築はシンプルです。双子の官舎、実はとても貴重な建築物なんですよ」

樫野埼灯台の官舎

優しさと強さを秘めた風土と調和する白亜の灯台。

ブラントンは帰国するまでの9年間で、二十数基の灯台を建設し日本の灯台システムを確立しただけでなく、電信・鉄道・鉄橋建設にも意見書を提出し、近代土木建設の発展に尽力している。その9年間は、異文化との出会いや葛藤に満ちたものだったろう。

ブラントンの灯台をいくつか見てきた田中にとって、潮岬と樫野埼の灯台は格別という。美しい海、緑、空に佇(たたず)む白亜の灯台。周囲の美しい自然と見事に調和しているのだ。初めてこの地を訪れたブラントンは何を思って二つの灯台を設計したのだろうか。

明治23年トルコ軍艦エルトゥールル号が樫野埼沖で遭難したとき、地元住民は身を挺(てい)して救助し、死傷者を手厚く看護した。その後慰霊碑が樫野埼に建てられ、今も毎年地元の小学生によって、清掃が行われている。その歴史が日本とトルコの架け橋となっている。優しさと強さを秘めた風土。長い間、厳しい自然と対峙(じ)し、航行の安全を見守ってきた二つの灯台の姿と重なる。